

人工血管を中枢側吻合とした遠位バイパスの1例

宗像水光会総合病院 心臓血管外科

岡崎 悌之 (おかざき ていじ)

中村 英司, 堀 英嗣, 田山 慶一郎, 小須賀 健一

患者は61才男性, 糖尿病性腎不全による血液透析が行われ, 冠動脈バイパス術(CABG)の既往がある. 前医にて左下腿部切断となり義足作成, リハビリ目的にて当院転院となった. 入院中に右足部潰瘍が出現した. 右浅大腿動脈にステントが留置されていたが再狭窄と診断し, 人工血管にて大腿動脈-膝上膝窩動脈(F-P)バイパスを行った. 潰瘍は治癒し退院されたが潰瘍が再燃した. F-Pバイパス末梢側吻合部狭窄と診断し, 人工血管を中枢側吻合とした遠位バイパスを行った. 冠動脈バイパス術, 左下腿切断(自家静脈によるバイパス後)が行われており, 自家静脈には制限があった. 同側の小伏在静脈および下腿の表在静脈を採取し, 前・後脛骨動脈にバイパスを行った. 前脛骨動脈へのバイパスは早期閉塞したが, 後脛骨動脈は開存し, 横断的中足骨切断で創治癒を得た. 自家静脈に制限がある場合の遠位バイパスについて考察を加え報告する.